大分県大野郡緒方町字馬背畑の珍しい二重の洞崖について

マリオ・マレガ

昔、緒方地方は、緒方氏の領分であったが大友義重（宗麟）ドン・フランシスコの時、緒方地方の国衆が宗麟に逆いて薩摩に逃げた。

そこで緒方氏の代りに志賀氏が緒方地方の国衆となった。その国衆の子息、志賀近嗣が臼杵城下町で受洗して、ドン・パウロの名前をもらった。（当時は身分の高い者が受洗する時、ドンの敬称をつけた）この志賀ドン・パウロが宗麟の一番有名な武将となった。現在の、竹田市の岡城は志賀ドン・パウロが造ったものである。（「荒城の月」の作曲によって全日本に知られた城である）

島津の軍勢が豊後を攻めて、府内の城下町に放火し焼失せしめた時、宗麟の守った臼杵城と、志賀ドン・パウロが守った岡城だけが薩摩の武士に兜を脱がなかった。この為に志賀ドン・パウロの勇名は広まった。大友宗麟が亡くなった後、その子義宗が豊後の館となった当時、大阪城に居った秀吉を訪問する義務があったので、義宗は志賀近嗣ドン・パウロと共に大阪城にのぼった。志賀近嗣は常に首飾りとして胸に金の鎖と、金の十字架をつけていた。義宗は秀吉が凡ての伴天連を日本から追放し、有名な切支丹高山右近を流罪に処したのを知って近嗣に胸から十字架をとるよう命じたが、信仰に忠実な彼は、その言葉に従わなかった。（義宗は自分が切支丹であるにも拘わらず、秀吉の怒りを恐れて府内の一番熱心なキリシタンであった仲間ヨハネとその家族を殺すよう命じ、又野津地方の切支丹であった奉行新村ヨアキムを殺させた）さて二人が大阪城で秀吉と晩餐を共にしたとき、秀吉は近嗣の十字架をみて、義宗に向い「この武士こそ偉い者だ、自分が切支丹であるこ

とを隠さぬから彼に倣え」と云った。近嗣がこれ程の熱心な信者であったから竹田地方に沢山の切支丹が出来、寺の住職までが入信した。

朝鮮の役が済んだ後、大友義宗が総大将小西行長の命令に従がわなかった科で、秀吉から豊後の国を取上げられ佐伯、府内、臼杵、竹田、日出、杵築等七つに分割された。竹田市は中川久盛が大名となった。久盛は切支丹でキリスト教を保護した。徳川時代になって二人の神父が岡藩に身を隠した時、久盛の子の代になっていたが、切支丹でもないにも拘らず、詮索しようともしなかった。先にのべた馬背畑の二重の洞窟はこの神父の一人イタリア人 PADRE・BOLDRINO（このパードレの語が後に伴天連となった。）がかくれた。現在、車道から農家の裏に深い谷があり、川が流れている。その農家より五、六米下ると物置のような四角の洞窟が堀ってあり農具が置いてある。入口より突当りの壁には、ゴチック式のアーチが刻まれており、左側の壁のすみの地面に五十糎四方の穴があり、それがもう一つの地下室の入口となっている。地下室も上の洞窟と同じ大きさのものであり、その中にパードレ・ボルドゥリノが昼間数年間続いて身を隠していた。フランスの歴史家 LEON・PAGES の切支丹宗門史に示されている。（当時在日中の宣教師が本国に送った手紙によってヨーロッパには日本の実状が知らされていた）パードレ・ボルドゥリノは夜間隠家より出てあちこちに散在する信者の家を訪問していた。その後、神父は豊後より出て他の藩の信者を訪れていたが、後本州に渡って近畿、北陸の信者の家庭を訪問し、新潟に長期間布教後、過労の為に病死した。最近、秋田市の歴史研究家、一高等学校教諭よりこの地に「異人の墓がある」と私に語って、「誰の墓か」と尋ねられ、「役人から殺されず病死したのは唯一人宣教師しか居ないことから考察し、多分このボルドリノ神父の墓と推察している。

緒方地方第二の洞窟について

今迄話した馬背畑の洞窟から一粁半ばかり歩いた田圃の中に古墳の様な小高い塚がみえる。塚の下腹に長方形（高さ二米巾七〇糎位）の入口があって、中は四角な部屋にねって居り天井は半円形をしている。地面（床）の右の方に四角の穴があ

りそこから地下に入れるようになっている。然し現在の地下室は上から落ちた土によって半分位埋まっている。

この地下室にイタリア人 NAVARRO（ナバロ）神父が一時身を隠していた。この宣教師も、何時か豊後を去って、他の地方に布教している時役人から捕えられて、集団火刑に処せられ殉教した。

一六一七年、秀忠が、大村の大名に、すべての宣教師を日本から追放するように命じた時、ボルディリノ（BOLDRINO）師とナバロ（NAVARRO）師とが豊後にいた。ボルディリノ師は一五七六年、イタリアに生まれ、一五九三年にコンパニヤ（イエズス会）の会員になった。一六三三年、五七才で餓死した。一六一四年に家康が、全ての宣教師に、日本から出ていくように命じたので、全国に散っていた宣教師は長崎に集った（三月頃）宣教師を運ぶ船が十月になって、ようやく出発した時、僅かの宣教師だけが船にのって出発した。長崎の奉行が切支丹だったので、他の宣教師は、あちこちで身を隠した。また、マカオまで、あるいはフィリッピンまで船で行った宣教師達も、次第々々に商人の船に乗って秘かに日本に戻って来た。

ボルディリノ師は、日本から出ず、現在の大分県にある竹田市の地方に身を隠した。豊後の岡藩（現在の竹田市）の大名、中川内膳が、一六二〇年に江戸から九州に戻る途中、東海道を通った時、道の両側にどこでも、江戸から京都に到るまで、十字架につけられた切支丹の死骸を見た。それは秀忠の仕業だった。全ての大名に、各々の藩の切支丹を亡ぼすよう教えたかったからだった。岡藩の内膳公も、岡城に着いてすぐに全ての切支丹の名を帳面に記するよう命じたので、藩内の切支丹が次から次へと他の藩に逃亡した。それを知った内膳公は、切支丹調べをやめることを命じた。百姓と職人が皆他方へ行ったら、藩内の働く者がなくなり、これは藩にとって一重大事になる筈だった。するとボルディリノ師は今まで住んでいた地下の洞窟を出て、当時切支丹であったヨハネ・デイダゴ（DIDAKO）町奉行の屋敷に住んだ。迫害の心配がなくなったので、また多くの人々が洗礼を受けた。そして、大名も知ないふりをして、何も言わなかった。

一六二四年、ボルディリノ師は天草にいた。そこから肥後の館であった加藤忠広（清正の子）は切支丹を全く迫害しなかった。しかし、八代の城下町の町奉行であった馬の尉だけが切支丹を殺した（商人のルイス、六偉門、その妻マリア、十八才に

なる召使のアロイジオ。一六二四年十月七日殉教）。天草からボルディリノ師が上方と東北で布教したが、迫害が増々厳しくなったため、山の中に、常に身を秘めていなければならなかった。そして、ついに一六三三年十二月八日（無原罪の聖母の祝日に）雪の中で餓死した。

ナバロ・ペトロ・パウロ師（PADRE NAVARRO・PIETRO・PAQLO）は一五六〇年、イタリアのナポリに生れ、一五八八年に来日し、三十六年間、日本において布教した。

一六一四年、家康の切支丹追放令の時、豊後の岡藩のボルディリノ師とは違う別の洞穴に一六一七年まで穏れており、その間、身体が相当弱っていた。

一六二〇年には二十二人の神父と六人のイルマン（修道師）が日本にいた。神父の中には、ナバロ師やボルディリノ師の他、他のイタリアから来た宣教師もいた。京都に天文学校を開いたカルロ・スピーラ師（CARLO・SPINOLA）師。北海道について書物を書きのこしたデ・アンジェリス師（DE ANGELIS）。その他ゾラ師（ZOLA）。ジャンーネ師（GI－－ANONE）。ポルロ師（PORRO）。アダミ師（ADAMI）。オルスチ師（ORSUCI）等がいた。

豊後の地下の洞穴に隠れていたナバロ師が一六二一年に役人に捕えられた。彼は、有馬校（COLLEGIO）（音楽とか油絵等の芸術、その他外国語を教えていた）で三年間校長の職を務めた。クリスマスの時、有馬から四キロメートルはなれた八良尾（HACHIRAO）城に三つのミサをたてた後に、有馬城下町へ戻る途中、足軽の一隊と出合い、ナバロ師を島原の城下町へつれていった。島原藩の大名であった松倉重政（一五七四ー一六三〇）はフィリッピン島カマカオと貿易していたので、ポルトガル人とスペイン人の機嫌をとるために、ナバロ師を鄭重にもてなした。ナバロ師を牢獄に入れるかわりに立派な屋敷を作らせ、そこに住まわせた。そこでナバロ師は、毎日ミサをたて、信者に話すことが出来た。そのようにして十ケ月がすぎた。その間ナバロ師はキリストについて書物を書き、大名へ献上した。

ナバロ師が昔、ナポリ王国のライノ（LAINO）の町に生まれ、十八でコンパニヤ（COMPANIA）に参加した。一五八四

年にインドに渡り、一五八六年に神父になった。一五八八年、ナバロ師はこの日本に着き、四国の伊予に布教した。半年そこで務め、阿波（現在の徳島県）の大名、蜂須賀氏の城下町にも多くの切支丹が生まれた。それから、長崎ー大村ー有馬を経て、山口に四年間務めた。一六〇一年に長崎に戻り四つの誓願をたてた。

大分県に十二年間いた。一六一四年（宣教師が日本から追放された年）少しの間、豊後から離れて、日向の切支丹を訪問した後豊後に戻った。ナバロ師は多数の書を日本語で書いた。

一六二二年、島原に監禁された時、松倉豊後守は秀忠にナバロ師について相談し、彼をマカオ（MACAO）に送りたいと言ったが、秀忠は返事を送らなかった。ナバロ師が逃げないように、島原の切支丹四人と、有馬の切支丹四人が、ナバロ師を守るように約束した。ナバロ師が逃げれば、この人人の切支丹の生命をとるという条件だった。大名がたてたナバロ師のための屋敷が本当の教会になった。信者が長崎から、豊後、豊前から毎日、人がナバロ師のもとに集った。ゾラ師（ZOLA）も二回、島原の城下町に来て、ナバロ師を訪問した。島原の大名も時々ナバロ師のもとに訪れ、仲良く話しなどをした。ついに秀忠が、日本にいる全ての宣教師を火刑にせよと命じたので、松倉豊後守重政は、仕方なしに仕置場に準備をするように命じたが、ナバロ師の苦しみが余り長くならないように沢山の蒔を集めるよう命じた。それは、一六二二年十一月一日のことであった。ナバロ師が、その日、自分の家でミサをたてていたが、それが最後のミサになることを知らなかった。二〇人以上の信者が、そのミサにあずかった。ナバロ師は彼らに説教もした。午前十時に、重政自身がナバロ師の所に来てこの宣告を告げた。するとナバロ師は、次のように答えた。

「デウス様のために、生命を捧げることは、私の大きな喜びです。日本において三十六年間、神様のために働くことが出来たことについても感謝してます。また、天国において、必ず豊後殿（島原の大名のこと）のためにお祈りいたします。豊後殿が真理を得ることが出来ますように祈ります。」

大名は、そのナバロ師の言葉を聞いて涙を流した。この老令の大名は、昔の武士の精神を持っていたのだった。フィリッピ

ン島を占領するために、幕府に許可を願ったが、幕府は許さなかった。この大名が、この様に堅い性質の持ち主であったが、その子供は、乱暴な、我儘な人で、江戸では堕落した生活を送っていたことは、後に起きた島原の乱の一因となった。天才の父親から大低馬鹿な子供が生れるという諺は、松倉の家にも成り立った。

昼になって、ナバロ師が、首にロザリオをかけて、黒い衣の上にマントをつけ、仕置場へ向った。神父と共に五〇人の侍が歩いた。ナバロ師の助け手であった三人、つまりギョニジオ、ペトロとクレメンスの三人も黒い衣を着て、一諸に殉教する筈であった。

途中で連禱をとなえて歩いた。皆、アウディース（聞きいれ給え）と答えた。城下町の南、海を臨む小さな岬があり、そこが仕置場であった。そこには、もうすでに四人分の柱が立っていた。ナバロ師は、帽子を脱いでから、自分の柱に向っておじぎをし、それから、跪づいてお祈りをした。それから立って、皆に向い説教を始めた。役人が縄で柱にくくりつける時でも説教は続けられた。友人であった侍が、記念として、ナバロ師のロザリオと帯とをとった。見物人も山程いた。重政が全ての者に黙るように命じた。豊後守が腰かけた後に、役人が四人の殉教者のまわりに沢山の蒔でかこんだので、火をつけるとすぐに四本の柱は火の柱と化した。ナバロ師のマント衣がすぐに燃えたので、皆は、ナバロ師が、自分を苦しめるため、胸の所をまいていた鎖を見とめた。縄もすぐに焼けたので、ナバロ師は跪づき、イエズス・マリアの御名を唱えてから、その霊魂が天国に帰った。他の三人の日本人も同時に、祈りながら、自分の魂をイエズス様にお返しになった。島原の城下町の未信者までも大きな声で嘆き、罪のない人を殺さない方がよかった、と人々は呟いた。